

“新しい風景”を見よう

『都市問題』6月号巻頭の岸本聡子・杉並区長の表題「一喝破風雲」に注目したので抜粋して紹介する。

2023年の統一地方選挙は「自治と民主主義を地域から！」という取り組みが試される大きな契機となりました。全国的には憂慮すべき課題も突き付けられたことは事実です。しかしそんな中でも「希望の芽」と言える結果がいくつも生まれました。

私自身は、2022年6月の杉並区長選挙にて、住民の皆さんの支援によって奇跡の勝利を果たしました。その後、住民たちは「区長は変わった、次は議会だ」をスローガンに、自らが区議選に新人として立候補するという動きが起きました。そのほぼすべてが、30代～50代の女性たちです。カフェを経営していた40代の女性、保育士の30代女性、シングルで病氣経験のある50代女性など、じつに多様な面々でした。彼女たちとは、区長選挙の頃から、「政治のあり方自体を変えたいね」と話してきました。

一方、住民たちも多様な取り組みを通じて選挙を盛り上げていきましたインターネット上の政策比較サイト「杉並ドラフト会議」や、党・会派を超えて新人女性候補を中心に一斉に街頭に立つ「共同街宣」などです。私自身も、4月4日～14日まで、杉並区内の駅頭に立ち、投票率アップをめざす「ひとり街宣」を行いました。区庁舎の中ではなかなかお会いできない区民が声をかけてくださり、対話の場があちこちで生まれました。

こうした取り組みの結果、投票率は前回区議選より4.19ポイント(約2万人)上がり43.66%となりました。定数48議席のうち、新人は15人(31%)、現職12人が落選するという激震が走りました。また、48議席のうち女性は24人で男女半数が実現できました。さらに、上位15名のうち9名が新人女性であるなど、女性たちの奮闘が際立ちます。これによって、議会の勢力が大きく変わるチェンジがもたらされ、新議会はより地域社会や生活に近い多様性が反映されることが期待できます。地域の政治はまさに「民主主義の学校」です。ジェンダー平等や多様性を当たり前の価値にし実践していくためにも、二元代表制のもと議会の皆さんとの熟議を楽しみにしています。

昨年7月12日の東京新聞朝刊は、自転車で行った区役所に初登庁する岸本聡子・杉並区長を伝えている。岸本区長は記者会見で「日本で一番透明性が高く、住民参加が活発な自治体になりたい」と抱負を語った。それから1年近く経ち、杉並区の議会も大きく変わりつつある。杉並区と岸本聡子区長から学ぶことは多い。

(2023年6月21日)

